

サン＝ジョン・ペルス，根づいた彷徨い：没後50周年記念国際シンポジウム報告

上杉，未央
東洋大学経営学部：准教授

<https://doi.org/10.15017/7402171>

出版情報：Stella. 44, pp.231-236, 2025-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de l' Université du Kyushu

バージョン：

権利関係：



サン＝ジョン・ペルス，根づいた彷徨い ——没後 50 周年記念国際シンポジウム報告——

上 杉 未 央

2025 年 9 月，グアドループ県ポワンタピートルの文化施設メモリアル・アクトで¹⁾ 2 日半にわたって開催された国際シンポジウム「サン＝ジョン・ペルス，根づいた彷徨い (Saint-John Perse, L'errance enracinée)」は，没後 50 年という節目において，詩人の世界性と出自，移動と定着の関係を再検討することを目的とした大規模な学術集会であった。本シンポジウムの最大の意義は，ペルス研究における長年の中心的課題である普遍性の問題を，「彷徨い (errance)」と「根づき (enracinement)」という一見矛盾する 2 つの概念の緊張関係から再構成した点にある。

この問題設定は，1987 年に同地で開催された作家の生誕 100 周年を記念したシンポジウム「アンティル性と普遍性 (antillanité et universalité)」を重要な理論的前史としている²⁾。1987 年のシンポジウムは，それまで象徴主義的普遍詩人，あるいは外交官，亡命詩人として抽象化されがちであったサン＝ジョン・ペルスを，植民地的・島嶼的空間に明確に位置づけ直した点で画期的であった。とりわけ島からの突然の「離脱」=「ex-il」は，喪失ではなく詩的生成を駆動する根源的トラウマとして共有され，詩人の故郷を「失われた楽園」として単純に回復するのではなく，理想化やノスタルジーを排した批判的読解の必要性が強調された。詩人のアンティル性は，ローカルな起源や文化的特異性としてではなく，海・移動・混交・交易を内包する空間として捉えられ，その空間のなかから詩人の普遍性が立ち上がるという逆転の視座が提示されたのである。

2025 年のシンポジウムのテーマ「根づいた彷徨い」は，1987 年のシンポジウムの視座を継承しつつも，議論の焦点をアンティル性それ自体から，アンティル性が生み出す詩的運動性へと移行させている点に特徴がある。すなわち，アンティル性はもはや起源の回収点ではなく，彷徨いを可能にする構造的条件として理解される。「彷徨い」は，断絶や喪失の経験ではなく，むしろ歴史的・地

理的根を内包した運動として捉えられ、詩的主体は固定的なアイデンティティを持たない存在とされる。

このような理論的枠組みは、抽象的な議論にとどまるものではなく、シンポジウムのプログラム構成そのものに具体化されていた。各セッションは、特定の主題や方法論に分断されるのではなく、草稿研究・比較文学・翻訳論をはじめ、あらゆるアプローチが用いられ、アンティルという出自の問題から、詩学・自然表象・翻訳、さらには詩を読むこと自体への問題に、幅広く連続的に配置されており、「根つき」と「彷徨い」の緊張関係が、異なる角度から繰り返し照らし出される構成となっていた。以下では、こうした構成を踏まえつつ、いくつかの代表的なセッションを取り上げ、それぞれがどのように本シンポジウムの問題設定を具体化していたかを確認したい。

各セッションを通じてまず顕著であったのは、議論の空間的射程が大きく拡張されていた点である。アンティルに加え、地中海・アジア・アメリカといった複数の空間が横断的に論じられ、サン＝ジョン・ペルスの詩的思考が、単一の文化圏に回収されないトランスナショナルな構造を有していることが具体的に示された。とりわけ中国経験や翻訳をめぐる議論においては、詩の移動可能性そのものが、「根づいた彷徨い」という主題の具体的な顕れとして捉えられた。このような議論を通じて、サン＝ジョン・ペルスの詩が単なる言語的構築物ではなく、空間・身体・声を媒介とする総合的な詩的行為として理解されることが確認された。特に、複数の空間を横断する各セッションの議論は単なる比較にとどまらず、ペルスの詩的思考そのものが「中心なき世界の運動」によって成立していることを示唆していた。この点で本シンポジウムは、1987年のシンポジウムで提示された普遍性の条件としてのアンティル性という命題を、21世紀的なトランスナショナル文学研究の地平へと接続する役割を果たしたと言える。

「アンティルの親和性」をめぐるセッションでは、ペルスの草稿研究の第一人者エサ・ハルトマンによる発表「サン＝ジョン・ペルス『讚 (Éloges)』草稿におけるアンティル的母型と普遍性の探求」^{マトリス}が、その方法論的独自性の点でとりわけ注目に値する。1911年刊の『讚』草稿を精査したハルトマンによれば、グアドループに生まれ、フランス語とクレオール語が共存する環境で育ったペルスの初期草稿には、アンティルの自然や生活に根ざした語彙が数多く認められ

る。しかし推敲の進行とともに、こうした表現は次第に削ぎ落とされ、詩はより均質で普遍的な言語へと収斂していく。他方で、リズムや音楽性、口承的な言い回しといった形でクレオール的基層は微細に保持されており、同発表は、そのような言語間の相互作用を通じて、「根づいた彷徨い」という詩的構造が初期の作品からすでに形成されていることを明らかにした。このセッションを通じて、詩人のアンティル性こそは、詩人の出発点であると同時に、世界へと開かれた詩的運動の契機として位置づけられた。

「自然礼賛」の詩学を扱うセッションでは、ペルスの作品において植物・風・海といったモチーフが、単なる自然描写にとどまらず、詩的主体の存在様式そのものを形づくっていることが論じられた。これらのモチーフは、特定の土地に根ざしつつも、常に移動と変容を孕むものであり、「根づいた彷徨い」という概念を感覚的・象徴的に支える要素として機能する点が強調された。

またセッション「サン＝ジョン・ペルスの詩学」では、ドミニック・コンブによる『遠征』をめぐる発表が特に興味深かった。ペルスの『遠征』のヨーロッパにおける受容の様子を振り返りながら、この作品が英雄的な中心人物や物語的な完結性を欠きながらも、世界の広がりや運動を叙事的に提示している特異性が強調された。ここでの「彷徨い」は、語りの破綻や欠如ではなく、中心なき詩的構造を成立させる原理として機能しているものとされた。

シンポジウムの問題設定を言語の移動と受容の次元から担ったのが、最終日に設けられたセッション「翻訳の問題」である。同セッションにおいて、恒川邦夫による発表「『アジアからの手紙』の日本語翻訳者から見たサン＝ジョン・ペルスの中国」は、とりわけ重要な示唆を与えた。2020年に刊行された恒川の著書³⁾の内容に基づく本発表では、『アジアからの手紙』に内在する虚構性と自己演出の問題が、翻訳実践の立場から精査された。プレイヤー版に向けて再構成されたこれらの書簡が、事実の忠実な記録ではなく、詩人によって巧妙に作り上げられた遅延的フィクションであることを前提に、具体的な人物描写の歪みが検討された。とりわけ母宛の手紙に登場する裕容齡をめぐる記述に注目し、恒川自身が調査した彼女の実際の経歴と照合することで、書簡中に見られる矛盾や不正確さが浮かび上がった。また中国人のみならず、ヴァレリー、コンラッド、ジッドといった人物名が、親密な友情を演出するために恣意的に配置されている点も指摘され、こうした操作を通じて形成されるサン＝ジョン・ペルス

の自己演出の意味が問い直された。『アジアからの手紙』にかんしては、カトリヌ・マイヨによる網羅的かつ実証的な研究が知られているが⁴⁾、個々の逸話や説明の誤りや虚構の背後にある詩人の意図そのものを正面から問う試みは、必ずしも強調されてこなかった。この点を明確に前景化した恒川の発表は、詩人の自己演出という問題を鮮明に意識させる契機となった。

恒川の発表の最後に、『遠征 (Anabase)』冒頭の「序歌 (Chanson)」を、マニュエル・ノルヴァと恒川が二言語で朗誦する時間が設けられた。日本語の音の反復やリズムは聴衆の感覚に直接訴え、とりわけ「銅色 (ブロンズ)」や「異邦人」といった語が繰り返される響きは、意味理解を越えて詩の構造を伝えていたように思われる。フランス語に続いて響く日本語は、翻訳が単なる意味の置換ではなく、詩を別の音響空間において再生させる行為であることを示していた。恒川と同じセッションにおいてドミニック・ミエ＝ジェラルが『遠征』のロシア語訳について論じるなかでロシア語で詩の一部を読む場面があり、そこでも異なる言語の響きが聴衆の集中を高める様子が印象づけられた。さらにシンポジウム期間中、朗読や舞踊を伴う文化的セッションが日常的に組み込まれていたことは、本集会が文学研究の場であると同時に、詩の音声性が重んじられ、声に出される詩が深く根づいた土地における文化行事であったことを強く示していた。

セッション「東洋から西洋へ」における上杉自身の発表「『アジアからの手紙』、あるいは消えゆく西洋」は、ペルスの『アジアからの手紙』を、若き外交官アレクシ・レジェの自己形成の場として捉え、そこに表れる東洋理解の特質を検討するものであった。本書簡集は、友人や家族への手紙を通して1916年からおよそ5年間にわたるペルスの中国体験を時系列的に語る体裁をとりながらも、1972年のプレイヤー全集刊行に際して、創作された手紙を多く含む形で詩人自身によって再構成されているため、実体験と演出との境界が意図的に曖昧化されている。2024年にサン＝ジョン・ペルス財団が取得した、外務省事務総長フィリップ・ベルトロ夫妻宛の書簡を閲覧したことを契機として構想された同発表では、滞在中に実際に書かれた手紙に垣間見られるペルスの中国体験と、『アジアからの手紙』において提示される中国体験との齟齬を検討することで、自己演出の様子を具体的に明らかにすることを試みた。とりわけ領事業務への嫌悪と公使館勤務への希求に見られる外交官としての制度的葛藤、ならびに馬

と海のモチーフを通じて表象される記憶と孤独の問題に注目し、クレオール的な根をもつ感性と外交官のキャリアとの交錯が、ペルスの詩人としての自己認識をいかに形成したか示した。これらの要素は、中国滞在時に書き進められた『遠征』において象徴的次元へと昇華され、「根づいた彷徨い」という詩的構造の成立を準備していることを明らかにした⁵⁾。

シンポジウムのプログラムに参加するなかで強く感じられたのは、難解とされるサン＝ジョン・ペルスの作品を、現在においていかに読むことができるのか、また、いかに読ませることができるのかという困難を、発表者たちが共有しているという点であった。ミルナ・ボリュスによるペルスの詩作品のクレオール語翻訳をめぐる発表後の質疑応答では、クレオール語に訳すことの意義をめぐる活発な議論が交わされた。ペルスはグアドループに生まれた以上、すでにクレオールの詩人であって翻訳不要だという意見と、同地の中高生にとってペルスのフランス語は難解であり、クレオール語によってこそ詩を味わうことが可能になるという発表者の立場とは、作品の帰属と受容をめぐる根本的な問いを浮かび上がらせていた。くわえて、エコール・ノルマルの優秀な学生であっても『遠征』を知る者が少ないというドミニック・コンブの証言は、ペルスの今日的受容の状況を象徴的に示すものであった。さらにカトリーヌ・マイヨによるペルス作品を読むこと (lecture) をめぐる発表や、フランス文学教育を取り巻く環境が危機的状況にある英語圏の大学において、学生に「門の上に書かれた言葉 (Écrit sur la porte)」をいかに読ませるかをめぐるメアリー・ガラゲーの教育実践の報告は、ともに単なる方法論の提示にとどまらず、「詩を読むこと」そのものの可能性を問い直すものであった。とりわけ、長年にわたりペルスの実証的研究に携わってきた二人の研究者自身が改めてこの問いを引き受けている点に、シンポジウムの現在性が端的に示されていたように思われる。そうした点において本集会は、サン＝ジョン・ペルスの詩を「今どのように読むのか」という問いを、研究と教育の両面から突きつける場でもあった。

以上、駆け足での報告となったが、本シンポジウムの成果たる論集は、遠からずシャンプイオン出版社から公刊される見通しである。同書刊出の暁には、今回の記念集会の学術的な意義をいっそう具体的なかたちで確認することができるであろう。

註

- 1) グアドループのメモリアル・アクト (Mémorial ACTe) は、奴隷貿易および植民地主義の歴史に関する記憶の継承を目的とする文化施設であり、2015年に開館した。19世紀に至るまで強制労働が行われていた製糖工場の跡地に建設されている。
- 2) *Saint-John Perse : antillanité et universalité*, colloque international Pointe-à-Pitre, 30 mai-1^{er} juin 1987, présenté par Henriette LEVILLAIN et Mireille SACOTTE, Paris : Éd. Caribéennes, 1988.
- 3) 恒川邦夫『サン＝ジョン・ペルスの中国——〈アジアからの手紙〉と「遠征」』, 法政大学出版局, 2020年。
- 4) Catherine MAYAUX, *Les Lettres d'Asie de Saint-John Perse. Les réécrits d'un poète*, Paris : Gallimard, *Cahiers Saint-John Perse*, n° 12, 1994.
- 5) シンポジウムの後、2025年10月にフィリップ・ベルトロ夫妻とペルスの往復書簡集が刊行された。これにより、本発表で扱った資料の一部が公刊され、研究状況に一定の変化が生じたため、論集に寄せる論文では、議論の焦点を微調整することとした。具体的には、ポワンタピートルからの帰途に立ち寄ったパリ郊外の外務省史料室において新たに確認した、ペルスによる中国の政情分析レポートや、彼のポスト異動をめぐる証言資料を補助的に用い、『アジアからの手紙』において描かれる外交官としての活動が、同時代の公的文書によってどの程度裏づけられ、あるいは再構成されているのかを検討した。Cf. Isabelle DAVILLON (éd.), *Correspondance d'Alexis Leger (Saint-John Perse) avec Philippe et à Hélène Berthelot, 1917-1936*, Paris : Honoré Champion, 2025.